

「ストリート・ヴァンダリズム・参与観察」研究会 開催報告

2009 年 4 月 25 日 (土) 13:00~17:00

於 関西学院大学大阪梅田キャンパス

主催 * 研究班「東アジアのストリートの現在」

● プログラム ●

=第1報告=

「グラフィティのフィールドワーク——都市論とメディア論からの接近」

飯田豊 (福山大学人間文化学部専任講師) ・ 南後由和 (東京大学大学院情報学環助教)

=第2報告=

「沖縄の暴走族とヤンキーの意味世界」

打越正行 (社会理論・動態研究所研究員)

=第3報告=

「社会の観察と関与へ —そのなかで質的調査が占める位置と限界」

新谷周平 (千葉大学准教育学部教授)

=コメント=

鵜飼正樹 (京都文教大学人間学部文化人類学科助教授)

● 講演の概要 ●

ストリートを再領有する・＜私有化＞するにあたっては、しばしばヴァンダリズムが伴う。そして、それは様々な「問題」を惹起する。ストリートは誰のものか？なぜストリートにヴァンダルなものが登場するのか？ストリートにおけるヴァンダルな実践を社会学者はいかにして描くことができるのか？

そこで本研究会では、ストリートにおける若者の営為に着目し、最前線で研究をなさっている飯田豊、南後由和、打越正行、新谷周平の各氏にご報告いただいた。コメンテーターには、大衆演劇や参与観察法の専門家である鵜飼正樹氏を迎えた。

第1報告 飯田豊・南後由和：グラフィティのフィールドワーク

2004 年、東京大学大学院の講義と連動し共同調査として開始された調査。グラフィティという路上の表現の魅力とは？というシンプルな問いから調査がすすめられていく。しか

し、違法性をともなう匿名的な行為であることから、調査は難航。グラフィティに詳しい雑誌編集者やリーガルウォール NPO などの関係から徐々にヴァンダルなグラフィティ実践者に出会う。しかし、パーソナルデータを公開できない難しさは最後までつきまとう。そうすると、非正規雇用などの労働や生活の背景（孤独）がグラフィティという自己呈示的な実践に強く連関している点などを直接的に描くことができない。原稿を当事者に見せるたびに、怒られる。グラフィティそのものは、ほんとうに落書きのようなものから、目を見張る綺麗な「アート」まで様々。

個人的には、とくに、近年の、芸術的なピースを合法化しようとする動きに興味をもった。現代のグラフィティに、かつての、60 年代の学生運動のような抵抗的なメッセージはない。しかしながら、ヴァンダルなものが合法化されることは、きわめて「奇妙」に思える。グラフィティライターが、行政と協同して、街の落書きを消していくという実践も新たな空間秩序が編成されていく萌芽かもしれない。しかし、また、こうした合法化の流れにのらない、イリーガルな人びとの、ゴーイングオーバーの実践（下手なタグに上塗り）も興味深い。いずれにせよ、グラフィティも一枚岩ではなく、ヴァンダルな実践と空間、そして彼らの生活がきわめて複雑に絡み合っていることが浮き彫りになった。



第2報告 打越正行：沖縄暴走族への参与調査

沖縄の暴走族の意味世界の記述、および参与観察の経験についての報告だった。自身の参与のきっかけ・また苦労した経験談は、重厚な参与観察ならでは。166 人の暴走族・ヤンキーへの聞き取り、打越さん自身の走行距離 3000km（一晚平均 33km！）という、驚愕の

入り込み方である。参与当初、暴走族の専用掲示板に、「なんかおかしいやつがおる」と噂され、警察と間違われ、怪しまれる。しかし、「通過儀礼」(執拗ないたずら、喫煙のすすめ、卑猥な談話、暴走を迫走する際のテクニック、警察官との対処法など)に挑戦することで、打越さんは「アジト」へ行くことも許可される。

この深い参与のなかで、沖縄の暴走には、地元密着と合同暴走のスタイルといった特徴が明らかになってくる。沖縄の各中学を全校調べ、各暴走族へ聞き取りをするという、驚くべき徹底ぶりである。

これらの暴走族そのもの(意味世界)の分析、とくに公道だけではなく、「地元」というキーワードの重要性を提示されたことは、きわめて興味深い。個人的には、やはり打越さんの参与経験、すなわち、暴走族との関係性から描き出される記述スタイル(今回、口頭でお話になられた内容からの分析)に期待をよせてしまった。

第3報告 新谷周平：ストリートダンス、質的調査の限界

新谷氏はこれまで、若者のストリートダンスについて調査をおこなってきた。別の調査の帰り、夜の駅を歩いていたら、いつも同じ時間、同じ場所にいるダンサーに関心を覚えたのがきっかけだったという。しかし、ダンサーは常にダンスをしているのではなく、パチスロ・飲み会など、溜まることのひとつがたまたまダンスであったという程度のものである。そして、ダンサーの多くが、フリーターであることが明らかになり、こうした質的調査による社会研究のある種の限界のようなものを感じはじめる。「ちまちましたフィールドワークをして、社会の役に立つのか?」というきわめて挑発的な問いはわれわれにも重くのしかかる。

こうした問いは、サブカルチャーの内容・差異・意味論への関心からの距離感のあらわれでもある。意味世界の解釈で「新しいことを言えたら、それがなにか?」。こうした微細な差異のおりなす意味世界の背後には、世の中の構造の変わらなさ、若者にとっての現実の厳しさなどがうかびあがる。重要なのは、人が生きられるための基盤・公平性・多元性を構想することであり、具体的にはベーシックインカムが発想が議論を喚起する機能に着目することではないか、という提起で報告は結ばれた。

コメント 鵜飼正樹

かつて、鵜飼先生が参与観察をはじめたころ、そのスタイルは「色物扱い」され、誰にも理解されなかった。しかしいま、「まともなもの」として扱われている状況に先生自身、感動されていた(裏を返せば、私たち若手は方法論に関して「格闘」を体感していない)。

三つの報告に共通する要素が3点がある。第1は、「場」という要素である。グラフィティは、都市空間、暴走族は公道とギャラリーの集まりという場、新谷さんは、あえて言うならこうした学問という場に対する問いかけだった。

第2は、場の中の隙間(niche)という要素である。若者たちは隙間を見出して、自分た

ちの活動を見出す。グラフィティであれば、描ける場はあるのか/ある生き方をしている人にだけ見出せる隙間。暴走であれば、読み替えの実践。学問は、研究のあり方（オルタナティブという強いので、niche と呼ぶ）。

第 3 は、研究のなかにある社会学のいやらしさ、社会学のもつヴァンダルなものについてどう考えるかという要素。

そして、10 年後におのおのの社会学者がフィールドの人びとと、どのような付き合い方をしているのだろうか、という質問が投げかけられた。

フロアからは、「地元」というキーワードが指摘された。それぞれのフィールドにおける「地元」とはどのようなものか、などの質問がなされた。

【大学院 GP プログラム RA 山北輝裕】

● 参加者の感想 ●

個人的には、新谷先生の問題提起に、誰もうまく答えていなかったように思う。打越さんが、「新谷さんそんな人じゃなかった・・・」とつぶやいていたが、それこそ、もっとヴァンダルに議論して欲しかった。あのままだと、「じゃあ、みんなでボランティアでもしにいきましょう！実践！」みたいな、(大事だけど) アタリマエのオチになって終わり。時間が足りなかったというのもあるが、司会として、もう少しそのあたりに話をふるべきだったかもしれない。というか、参戦したかった。いずれにせよ、また今後、ST 班で話しあってもいいかもしれない。

また、ヴァンダルなものの背後には、「地元」やつながりが、あり、日常的なものの連続のなかで、ST にヴァンダルな現象があらわれていることが、どの報告でも指摘されている。いっぽう、その描き方は難しい（打越さんはかなり描いているが）。このあたりの議論は、また ST とエスニシティ研究会（6 月 20 日）にも繋がっていく議論だろう（イリーガルな面）。引き続き、考えていきたい。

【大学院 GP プログラム RA 山北輝裕】

「グラフィティのフィールドワーク」、「沖縄の暴走族とヤンキーの意味世界」、「社会の観察と関与へーそのなかで質的調査が占める位置と限界」、それぞれの報告に共通し、かつ、差異としても位置づけることができる参与観察にまつわるエピソードが印象に残った。「当事者」と知り合い、そこから何らかの関係を築き、参与観察をはじめ。グラフィティ実践者との出会いは、グラフィティを扱う雑誌の編集者の紹介がきっかけであったという。暴走族のメンバーやストリートダンサーとは、研究の対象として出会ったのか、それとも、日々の生活の中で偶然接点をもつことになったのか。そういった参与観察のはじまりにお

ける当事者との距離感に加え、知り合った相手との「その後」も興味深い。ストリートで落書きをしたり、暴走したり、踊ったりしていた人びとの多くは、いずれその行為を辞め、ストリートから去っていく。ストリートに一度は埋もれた経験をもつ人びとは、後にストリートという空間を振り返ることはあるのだろうか。また、そのとき、何を想うのだろうか。ストリートの現在と当事者の現在とのズレ、さらに＜回顧されるストリート＞もまた、研究課題の一つとなるだろう。

【大学院 GP プログラムコーディネーター 中川千草】

各報告各様の迫力をもった、それぞれの報告者の調査や思案の現場にふれた感触の残る、内容の濃い研究会だった。

飯田さんと南後さんのグラフィティに関する報告は、都市に暮らすわれわれがみたことがあるけど知らない世界を提示してくれた。ストリートアートの先駆者のひとりであるキース・ヘリングのドキュメント映像、“Drawing the Line”を、かつて見た。NYC 地下鉄の空き掲示板にチョークで 1 分とかけず線画を描いては立ち去っていく。あの画風はそこから生まれたのか！と感動したおぼえがある。1990 年代以降の日本でも、ピース(masterpiece)と呼ばれる「壁画」の一部は近年アートと認められる動きもあるらしい。一方、報告でおもに取り上げられたのは比較的手軽で増加傾向にあるタギング(tag-ing)で、アルファベット文字で実践者各自のタグを壁やシャッターに書き付けていく匿名的な営為。いっけん無秩序な落書きにみえるそれらから、(実践者たちのあいだでだけ通知可能な)都市に息づく不可視の親密性のネットワークを読み取るという調査の面白さが伝わってきた。

打越さんの報告では、沖縄の暴走族にどっぷりと漬かった参与観察の成果がユーモラスな語り口で展開され、思わず聞き入った(私は会場撮影を担当したが打越さんの報告場面は 1 枚もカメラに収まっていない…)。社会学には佐藤郁哉(1984)『暴走族のエスノグラフィ』という大きな先行研究があるが、それを凌駕するフィールドワークだと思う。私としては暴走をコンビニ駐車場で観戦する地元「ギャラリー」の存在、なかでもキセツ(本土での季節労働)から帰ってきた者どうしがそのギャラリーに含まれているという点に興味を覚えた。暴走族は群れる。かれらの走りをみにギャラリーは群れる。だが、なぜ？暴走族に結晶したヤンキー文化のもつ地元志向性の表出にギャラリーはみずからの地元アイデンティティを仮託する。そしてそれは、友達を数人たどればすべてつながっていくような「沖縄の根強い地域コミュニティ」と表裏一体なのだろう。

新谷さんの報告は、ストリートダンスを事例に地元つながり文化を論じた自らの研究や上記の本研究会報告のような質的事例研究にはいったいどんな意味があるのか？という問いを投げかけた。「生身の人間が生きていくためにはどういう社会的な財、労働の再配分の方法が必要で可能なのか」という問題意識から発されるこの問いに、ただちに応えるのは困難だ。この問いは、のちにコメンテーターの鵜飼さんから提示された、社会学の事例解釈に

つきまとう自足的言説のいやらしさ、という内省的言辞と同根だと思える。これには生半可な社会学者の自己言及では応答できない。質的な事例研究は研究で終わるのではなく、にができるか? 「社会に資する」と看板に掲げた本 GP プログラムが、これから2年間かけてそれに応答しうるだけの議論を重ねていけるかどうか、という課題を与えられたような…気がする。

【大学院 GP 特任助教 白石壮一郎】

以上。